

内 容

* イギリスにおけるリカバリー研修ツアーの報告(8)

○ ピアサポート事業について

ピアサポート事業マネージャー シャロンさん他

* イギリスにおけるリカバリー研修の報告(8)

○ ピアサポート事業について

ピアサポート事業マネージャー シャロンさん他

(シャロン) 先ず私の役割についてお話ししたいと思います。

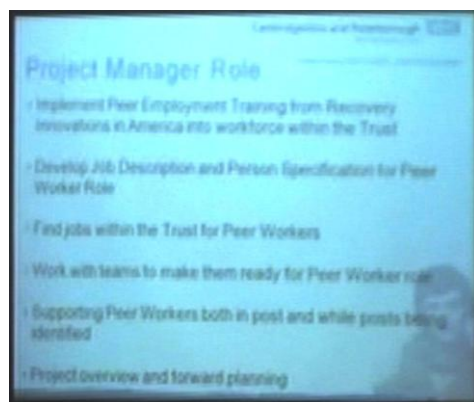
2009 年 11 月にピアを雇用する事業にマネージャーとして雇われました。ここまでに、組織のトップやマネージャーが活動を進めていくのか、ボトムアップで下からの進言で進めていくのか、という話が有りました。私たちの組織のトップはアメリカのアリゾナに視察に行きました。そこには先程話していただいたジャネットさんや 2 名の精神科医もいました。そしてアメリカ視察の中で我々が何か取り入れるものが有るかという、それはピアサポートワーカーであると結論付けました。

そこで私の役割はピアサポートプロジェクトを立ち上げ、可能な限りピアサポートワーカーを雇うという事でした。そして私が最初に行ったのは、NHS にその様な土壌が有るかを検討することでした。

ピアの活動チームは幾つかありました。そしてチームによっては精神疾患の患者さんと協働して活動していくところが有り、非常に感銘しました。でも違うチームでは患者さんと一緒に働くことを拒否していました。ですからリカバリーのための組織を作るにはどの様にして活動していけば良いのかというのは、とても大変な事でした。

最初に行ったのは、ピアサポートワーカーが組織の中でどの様な活動を行っているのかを、細かく書き出した仕様書を作りました。それからアメリカのアリゾナで活動しているリカバリーイノベーションズという組織にトレーニングを依頼し、4 か月間来ていただき研修を実施しました。

ここで私自身について少し触れたいと思います。私はソーシャルワーカーの専門職で、20 数年間精神保健の分野で働いています。そしてこの間に私自身の精神疾患についてお話したことは有りませんでした。



ソーシャルワーカーは精神疾患が働く仕事では無いと考えていたからです。日本では分かりませんが、英国では4人に1人が何らかの精神疾患で悩んでいると言われています。私が自身の精神的な悩みを話さなかったのは、話すことによってスティグマが有ることを理解していたからだと思います。そして私自身も精神疾患が有りながらソーシャルワーカーの仕事が続けられるのか、という事を疑問視していたのだと思います。

最初に行くことはスティグマと戦うことです。そしてかなり重度の精神障害を患った方にも、ちゃんと暮らすために参画して頂く事だと思います。軽度のうつ病などの疾患者だけではなく重度の精神疾患者にもピアサポートワーカーになって欲しいと考えています。

研修に参加することはとても大変なことです。そして終了することはもっと大変なことです。研修については同僚のトレーシーさんが、後でもっと詳しくお話しくたします。研修は毎日で4週間続きます。そしてそれを終了するとピアサポートワーカーの仕事に応募する事が出来ます。

それではこれからピアサポートワーカーについてお話ししたいと思います。

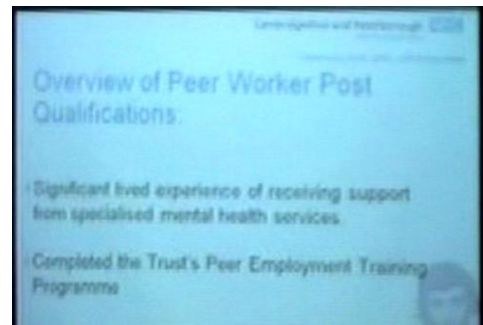
現在40人のピアサポートワーカーが雇用されています。コミュニティセンターや入院病棟にもいます。若者のためのサービスや知的障がい者サービス、触法精神障がい者向けサービスにも雇用したいと考えています。ピアサポートワーカーの存在は組織運営にとっても大きな影響を及ぼしています。各チームにおいて通常使われている言葉についても、ピアサポートワーカーが違和感をおぼえた言葉については異論を言う事が出来ます。更にピアサポートワーカー自身は、障害を持っているのに職業を得ているという事で、障がい者のモデルケースであるという自覚も生まれます。

(シェパード)このようなシステムを英国で初めて取り入れたのはケンブリッジの我々の組織です。アメリカで開発された研修で、4週間(20日間)で終了します。先程シャロンさんは難しいと話していましたが、とてもシンプルなものです。ジュリーさんは自分自身で研修内容を開発したとお話しされていましたが、内容は大体同じようなものです。でもジュリーさんの研修は1週間1回の研修で10回の研修ですから10週間必要という事でした。

どの様な研修がベストかという事は未だ判らなく試行錯誤中というところですよ。

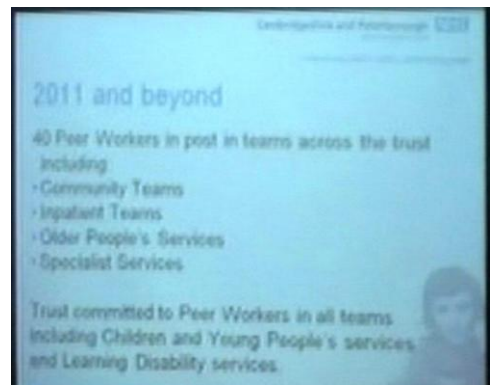
(シャロン)我々の4週間の研修は月～金、毎日フルタイムで行われますので、研修が終わったあと勤務に入るのは割とスムーズです。基本的にピアサポートワーカーの仕事はパートタイムですので無理なく入っていけるわけです。

(トレーシー)今日は私に話す時間をいただき有り難うございます。私は2名いるピアサポートトレーナー(ピア・エデュケーター)の一人で働き始めてちょうど1年になります。これからトレーナーになるための資格についてお話しします。



ピアワーカー職の資格概要

1. 専門的なメンタルヘルスサービスによる回復支援の経験。
2. トラストのピア雇用研修プログラム在籍。



2011 年以降

トラスト全体のチームに40名のピアワーカーを配置

1. コミュニティチーム
2. インパリッドチーム
3. 高齢者サービス
4. 専門サービス

児童・青少年サービス、障害者支援サービスを含むすべてのチームに、トラストコミュニティのピアワーカーを配置。

最初に、私は精神的な病気を持っていますが、私の生活は限られたものでは無く、色々な可能性を持つ事が出来るという情熱や信念を持っているという事です。私は色々なチャレンジをすること、夢を持つこと、家族を持つことが出来るという事をリカバリーの過程で知る事が出来ました。

次に私が人生で経験してきたことをお話ししたいと思います。2年前私は精神病棟に1週間入院していました。2009年のことです。その時私は今まで経験した全ての事から切り離され、全てを失ったと思いました。そして私は子供の世話をする事も出来ませんでしたし、仕事も失いました。そして多くの借金を抱えていました。

私のリカバリーは病院にいる間に始まりました。私に希望を与えてくれたのは、同じ病室に居た患者さんです。私は家に帰れるようになって、私の人生を再構築できると感じ夢も希望も持てるようになりました。そしてその時大事な事はユーモアのセンスと笑うことでした。

ピアサポートワーカーが病室に入っているのは変じゃないかと思う方もいると思いますが、ピアサポートワーカーは自然に病院に入り、病棟に入り仕事をしています。

(シェパード)この件についてコメントしたいと思います。

ここ(フルボーン病院)は40年前に治療的コミュニティ、治療的地域という事で、良く知られています。そして治療的コミュニティとして最も重要なのは、患者同士が助け合うという事でした。ですから患者が助け合うという事は新しい事では無いのです。先程話が有りましたように何が新しいかという、ピアの活動が正式に制度化され有給になったという事です。

(トレーシー)あと一つ追加したいのは、私がピアサポートワーカー研修を修了することです。私とその研修を受けている間にピアサポートワーカーの仕事が有りますと言われていました。但しそれに応募するには他の資格も必要でした。先ず学士号を持っていること、教師として働いた経験が有ること、私は教師として働いた経験とジャーナリストとして働いた経験が有りました。この様な経験と資格を有しておりましたので、ピアサポートトレーナーとして採用され働いています。

(シェパード)トレーシーさんは、一般のピアサポートワーカーではなくピアサポートトレーナーとして働いています。この職種は研修を担当するピアエデュケーター(教育者)と呼ばれています。

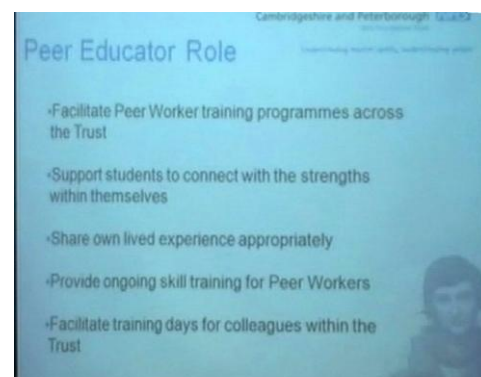
(トレーシー)私はピアサポートトレーナー(ピアエデュケーター)として働いています。あと一人同じ立場の方がいますので、2人で協力して働いています。

プログラムは先程もお話ししましたが4週間の内容です。その中には実際の現場に入って実践で研修していただくこともあり、



ピアエデュケーター - 資格

1. 充実した人生を送ることは可能だと信じていること。
2. ピア・エンプロイメント・トレーニングを修了していること。
3. 専門的なメンタルヘルスサービスからのサポートを受けた経験があること。
4. 学歴および教育経験があること。



ピアエデュケーター - 役割

1. トラスト全体のピアワーカー研修プログラムを支援する。
2. 生徒が自身の強みと繋がれるように支援する。
3. 自身の経験を適切に共有する。
4. ピアワーカーに継続的なスキル研修を提供する。
5. トラスト内の同僚のための研修日をアシストする。

かなりハードな学びの時間になります。宿題も多くありますし、4回の試験もあります。ワークブックの量も大変多く、練習課題も沢山ありますので、それらをこなしていけるかが非常に重要です。

プログラムは3つの柱に分かれます。第1は自己啓発です。自己啓発ではリカバリーについて焦点を当てます。自分をどの様に見るかという自己評価についてです。またこの国の多様な文化という事も検討していきます。ピアサポートトレーナーとして係わっていくには、その意味・目的を理解し、情熱と責任、係わっていく決意、などが重要です。これらの事が自己啓発になります。

仕事のための準備が第2の柱になります。その中でも重要なことは自身の経験を如何に適切に分かち合えるかという事です。上手く分かち合うことにより、同じ経験を持つ人の道しるべ、となる事が出来ます。

(シェパード) ジュリーさんの話にも、自分の経験を提供すること分かち合うことについて、何時話したら良いか、どの位の量を話したら良いか、でも自分の話ばかりするのではない、という話が有りましたが、トレーシーさんの今の話と同じことと思います。

(次号に続く)



－編集後記－

6月24日から4泊の日程で、中野さんと、フランスボルドーに行かせていただきました。ボルドー大学主催の「“脱施設化“に関する国際セミナー」への参加、日本の事例としての活動紹介が目的です。ボルドー大学へ留学経験やフランスの研究を続けておられる先生にアテンドしていただいたので、フランス語が全くわからない私たちも不安なく参加できました。また、通訳の方がとてもとても素晴らしく、発表も、質疑も、セミナーの期間のあらゆるところでの意見交換も、丁寧にサポートしてくださりました。いくつかの国や多様な立場の方々が参加されており、2日間に渡り充実した内容のセミナーで沢山の事を考えさせられました。聞き間違えていなければセミナーの内容は大学から出版されるところなので、具体的なことはその時に、と思っています。それ以外で2点、思うことがありこの機会に記しておきたいと思います。

1つ目は、2022年に国連障害者権利委員会が「脱施設化に関するガイドライン」を発表しているということ、恥ずかしながら今回はじめて知りました。20年以上前に、故谷中さんに「ケアマネジメントを学びに行きましょう」とアメリカへ行かせていただいた頃から“脱施設化“というキーワードに注目していたし、議論も頻繁にしていました。1950年代から、様々な国で、様々な分野で行われてきた“脱施設化“についてもずいぶん学び、それらを根底におきながら実践を続けてきたつもりであったにも関わらず、今回のガイドラインをチェックできていなかった自分をとても恥ずかしく思いました。この機会に今一度足元を見直したいと考えています。

2つ目は、やはり、海外に出て、現地で実際に触れながら、日本の事を考える大切さを再認識したことです。いつの間にか、目の前の現実を追われ、視野が狭まり、方向性が定まらなくなっている自分に気づいたような気がします。(長野)

